

線ギャップとエルミート化

塩崎 謙

March 26, 2021

[1]に従って、ハミルトニアン $H(\mathbf{k})$ に実線ギャップが開いているときに、実線ギャップを閉じずに連続的にエルミート化できること[2]を確認する。以下は[1]のApp. Dのほぼ写しである。

まずは対称性を気にせずに、実線ギャップを有するハミルトニアン $H(\mathbf{k})$ は平坦化できることを示す。実線ギャップ条件より、 $H(\mathbf{k})$ の固有値 $\epsilon_n(\mathbf{k})$ は $|\operatorname{Re} \epsilon_n(\mathbf{k})| > 0$ を満たす。¹このとき、ハミルトニアンの連続変形

$$H_{\mathbf{k}}(\lambda) := (1 - \lambda)H(\mathbf{k}) + \lambda \left(\oint_{C_+} - \oint_{C_-} \right) \frac{dz}{2\pi i} \frac{1}{z - H(\mathbf{k})} \quad (1)$$

を導入する。ここで、 $C_+(C_-)$ は、 $\operatorname{Re} \epsilon_n(\mathbf{k}) > 0 (< 0)$ なる固有値を囲む経路。

$$P_{\pm}(\mathbf{k}) = \oint_{C_{\pm}} \frac{dz}{2\pi i} \frac{1}{z - H_{\mathbf{k}}} \quad (2)$$

は $P_{\pm}(\mathbf{k})^2 = P_{\pm}(\mathbf{k})$ が成立するため、²射影である。 $H_{\lambda}(\mathbf{k})$ の固有値は

$$(1 - \lambda)\epsilon_n(\mathbf{k}) + \lambda \operatorname{Re} \epsilon_n(\mathbf{k}) \quad (4)$$

で与えられるため、 $\lambda \in [0, 1]$ について実線ギャップが保たれることがわかる。

$$H_1(\mathbf{k}) = P_+(\mathbf{k}) - P_-(\mathbf{k}) \quad (5)$$

の固有値は ± 1 である。換言すると、 $H_1(\mathbf{k})^2 = 1$ である。続いて、エルミート化する。 $H_1(\mathbf{k})$ を実部と虚部に分解する。

$$H_1(\mathbf{k}) = h_1(\mathbf{k}) + ih_2(\mathbf{k}), \quad (6)$$

$$h_1(\mathbf{k}) = \frac{H_1(\mathbf{k}) + H_1(\mathbf{k})^\dagger}{2}, \quad h_2(\mathbf{k}) = \frac{H_1(\mathbf{k}) - H_1(\mathbf{k})^\dagger}{2i}. \quad (7)$$

$1 = H_1(\mathbf{k})^2 = h_1(\mathbf{k})^2 - h_2(\mathbf{k})^2 + i\{h_1(\mathbf{k}), h_2(\mathbf{k})\}$ より、

$$h_1(\mathbf{k})^2 - h_2(\mathbf{k})^2 = 1, \quad \{h_1(\mathbf{k}), h_2(\mathbf{k})\} = 0 \quad (8)$$

に注意する。連続変形

$$\tilde{H}_\lambda(\mathbf{k}) = (1 - \lambda)H_1(\mathbf{k}) + \lambda h_1(\mathbf{k}) = h_1(\mathbf{k}) + i(1 - \lambda)h_2(\mathbf{k}) \quad (9)$$

を導入する。

$$\tilde{H}_\lambda(\mathbf{k})^2 = h_1(\mathbf{k})^2 - (1 - \lambda)^2 h_2(\mathbf{k})^2 = 1 + (1 - (1 - \lambda)^2)h_2(\mathbf{k})^2 \quad (10)$$

¹ λ が行列 A の固有値であるとは、 $Au = \lambda u$ なる $u \neq 0$ が存在することと定義される。 $\lambda - A$ が特異であることと同値。

²例えば、[3]を見よ。レゾルベント方程式

$$(A - w)^{-1} - (A - z)^{-1} = (z - w)(A - z)^{-1}(A - w)^{-1} \quad (3)$$

と積分経路の変形を用いる。

であるが, $h_2(\mathbf{k})$ のエルミート性より $\tilde{H}_\lambda(\mathbf{k})^2 \geq 1$, つまり, $\tilde{H}_\lambda(\mathbf{k})$ の固有値は実であり, かつ絶対値は0より真に大きい. よって $\lambda \in [0, 1]$ において $\tilde{H}_\lambda(\mathbf{k})$ は実線ギャップを保つ. $\tilde{H}_1(\mathbf{k})$ はエルミートなので, これでエルミート化ができた. (さらに $\tilde{H}_1(\mathbf{k})$ を平坦化すると, 平坦かつエルミートに変形できる.)

次に, 上記の変形が対称性と両立するかを考える. 考える対称性としては, 以下の形のもの考える.

$$U_g(\mathbf{k}) \left\{ \begin{array}{l} H(\mathbf{k}) \\ H(\mathbf{k})^* \\ H(\mathbf{k})^T \\ H(\mathbf{k})^\dagger \end{array} \right\} U_g(\mathbf{k})^\dagger = c_g H(g\mathbf{k}). \quad (11)$$

$c_g \in \{\pm 1\}$ である. $U_g(\mathbf{k})$ はユニタリ行列とする. 両辺のエルミート共役を取ると, $H(\mathbf{k})^\dagger$ も同一の対称性を満たすことがわかる. よって, $\tilde{H}_\lambda(\mathbf{k})$ は ($H_1(\mathbf{k})$ が対称性を満たすなら) 同一の対称性を満たす. $H_\lambda(\mathbf{k})$ も同一の対称性を満たすことも示される. まず, 転置は積分経路に影響しない. $c_g = -1$ の場合は,

$$\left(\oint_{C_+} - \oint_{C_-} \right) \frac{dz}{2\pi i} \frac{1}{z - c_g H(g\mathbf{k})} = \left(\oint_{C_+} - \oint_{C_-} \right) \frac{c_g dz}{2\pi i} \frac{1}{c_g z - H(g\mathbf{k})} \quad (12)$$

であるが, 変数変換 $z \mapsto -z$ より $C_\pm = -C_\mp$ となることに注意すると,

$$= c_g \left(\oint_{C_+} - \oint_{C_-} \right) \frac{dz}{2\pi i} \frac{1}{z - H(g\mathbf{k})} \quad (13)$$

を得る. 複素共役を含む場合は

$$\left(\oint_{C_+} - \oint_{C_-} \right) \frac{dz}{-2\pi i} \frac{1}{z^* - H(g\mathbf{k})} \quad (14)$$

において, 変数変換 $z \mapsto z^*$ より $C_\pm = -C_\pm$ となることに注意すると,

$$= \left(\oint_{C_+} - \oint_{C_-} \right) \frac{dz}{2\pi i} \frac{1}{z - H(g\mathbf{k})} \quad (15)$$

を得る.

結局, 対称性(11)のもとで, 実線ギャップを持つハミルトニアンは平坦かつエルミート化できることが示された.

$H(\mathbf{k})$ が純虚線ギャップを持つ場合は, $H'(\mathbf{k}) := iH(\mathbf{k})$ は実線ギャップを持つので, 上記議論により $H'(\mathbf{k})$ は平坦かつエルミート化できる. (変換 $H'(\mathbf{k}) = iH(\mathbf{k})$ に加えて, 複素共役を含む対称性については $c_g \mapsto -c_g$ と変換されることに注意.)

References

- [1] Yuto Ashida, Zongping Gong, Masahito Ueda, arXiv:2006.01837.
- [2] Kohei Kawabata, Ken Shiozaki, Masahito Ueda, Masatoshi Sato, arXiv:1812.09133.
- [3] Kato, Tosio. A short introduction to perturbation theory for linear operators. Springer Science & Business Media, 2012.